キリスト道講演会（京大会館）（縮小版Ｓ案）

生命の泉

１９８０年６月８日
奥田昌道

小池先生との出逢い　行き詰まりの時の助けの力　サマリヤの女との対話　人生の大事な瞬間
文化文明とは次元がちがう　働くことが祈り　永遠の生命の水　足を洗う　十字架の蔭に泉湧
きて　詩篇36篇9節「生命の泉」　我キリストと偕に十字架せられたり　永遠の生命をいただく

●小池先生との出逢い

皆さんよくいらっしゃいました。私は大学では、民法の教授ということになっていますけれども、ここではそういうことではなくて、本当に一人のキリスト者、キリストのものという立場でお話をさせていただきたいと思います。

私は小池辰雄先生に出逢いましたのは、今からちょうど20年前になります。それは１９５９年11月9日に楽友会館という所でエマオ会主催の講演会をいたしました。それまで私は小池先生という方を全然知らなかった。先生は「無的実存」という題で話されました。私はそれに触れて、

「これが本当の――「宗教」と言うなら――宗教だ。これはキリスト教ではない」

と思いました。やはり私がそれまでに接していた、視野の狭い、何か一つの宗教でこれを金科玉条に守って、ことごとに罪を赦していただいて、「私は一生、罪びとです」と言って頭をうなだれて、そしてまぁ何とか大過なくこの世を過ごすといったものではなくて、本当に生命のあふれるような、自由があった。何にも囚われておられない。そういう姿に打たれまして、私は小池先生を通して働いておられるキリストのとりこになりました。

私はその間、いろいろ悩んだことがあります。先生が告白しておられる次元が高すぎてついて行けない。けれども、その時に私を支えたのは何かといいますと、先生はいつも

「私は聖霊のバプテスマを受けてからガラッと変わった」

と言われた。それから実に先生を通して不思議なことが起こった。病める人の前で語っていると、いつの間にか病める人が癒されてしまうとか、不思議なことがいろいろ起こった。そのことで逆に、先生を白眼視する人たちが出てきました。「異端である」と言う。先生はそういう戦いの中を、

「ただ主イエス・キリストのみ、御霊のキリストのみ」

と言って歩んでこられた。私はそれを20年間ずうっと見てきました。

私が行き詰まったり、「もうついて行けない」と思った時も、いつも私に一つのまだ可能性が残っていた。それは、私も聖霊を受けたら、先生の言ってらっしゃることがわかる。私は信仰はいただいたけれども、まだ聖霊を受けていない。聖霊をいただいたら、先生の次元がわかると。それだけを一縷の望みにして私は――歯を食いしばってと言いましょうか――来たんです。１９６８年くらいでしょうか、あの鹿沢温泉の山の中で夏の特別集会がございました。その頃から何かしらひとつ吹っ切れものが出てきた。

「もう、どうでもいいや。私ではないんだ。自分の信仰だとか、自分の立派さだとか、自分の熱心とか、そういうものではない。キリストが本ものならば、私を捕まえて引っくり返りして、御業をなさるはずだ」

と、何かそういうふうな思いが湧いてきまして、その頃から少しずつ楽になってきまして、１９７２年から私は京都で小さな集まりを独立で持つことになりました。家内とたった二人でその頃は始めました。大学で「エマオ会」を１９５７年から始めておりますけれども、やはりだんだんと時が経つにつれまして、語るのが楽しいような、何か知らないけれども、だんだん楽になってきまして、「自分ではない」ということが本当にわかりました。

●行き詰まりの時の助けの力

私は、人が人であるかぎり神の言葉によって生きる、神の霊によって生きる、それだけでいいじゃないか。私が生きているということは、神さまの霊が、キリストの霊が私を貫いて生かしてくださっている。生きていることがその証である。それでいいんだと。そういう気持ちでおります。正直、行き詰まったり、本当に倒れ伏すようなことになった時、そのたびに私はキリストに祈ります。

「主さま、あなたは私の生命です。あなたは私の力です」

と。そして祈りますと本当に力がくるんですね。だんだんそれが味わさしていただけるようになってきました。ですから、前はこんな講演会というと、足が震えていたんですよ、正直ね。だけど今は、「もうどうにでもなれ」と思ってますので、神さま・キリストがなさってくださるからと。

この頃、私のような者を通してでも、病んでいる人のために手を置いて祈りますと、癒される。そういうことが不思議に起こる。私はただキリストの御力が働いてくださるようにという一念をこめて、キリストに祈ります。そうすると、私が手を置いたら、そこが４日も５日も熱いと言う。そして骨の痛みが癒えたとか、そういったことを体験なさる方もあったり、遠隔地で祈っておれば向こうで病が軽くなったりとか、そんなことがあったりいたします。私は不思議でなりませんが。はっきりしてますことは、キリストが私ごとき者を捕まえて、そして私の中に流れこんで、そして御業をなさるということです。この先どういうふうになさっていくか知りませんけれども、楽しみです。キリストは

「無条件でいい。何も条件は要らない」

と仰る。そのことをこれからこの「サマリヤの女」との会話のところで皆さんと一緒に味わいたいと思います。「生命の泉」という題です。

●サマリヤの女との対話

時は今から二千年前、ユダヤの地方の「サマリヤのシカル」という町に「ヤコブの井戸」があります。ヨハネ福音書第４章です。

「1**さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられる**
ということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、
2**――洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである――**
3**ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。**

南のユダヤからガリラヤへ行く。イエスがずっと過ごされたのはガリラヤです。時々、エルサレムへ、ユダヤ地方へ来られたけれども、また帰られた。その途中に、どうしてもサマリヤという真ん中の地方を通らなければならなかった。

4**しかし、サマリアを通らねばならなかった。**5**それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。**6**そこにはヤコブの井戸があった。**

イスラエルでは井戸というのは物凄く大事なものなんです。砂漠の民ですから井戸をめぐっていろんな争いもありました。井戸は命の源なんです。そういった井戸をめぐって羊飼いたちがいつも生活をしているわけです。その井戸です。

イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。7**サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。**8**弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。**9**すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。**

サマリヤ人は紀元前8世紀のバビロン捕囚のときにイスラエルに残った者と、アッシリヤ王が植民として送りこんだ異教徒との混血の子孫です。ユダヤではそういう混血人に対しては「穢(けが)れたる民である」と言って、サマリヤの人たちを蔑(さげす)んで、偏見を持っていました。そこで交際はしない。ところが、このユダヤ人であるイエスがサマリヤの女に

「水を飲ませておくれ」

と声をかけられた。国交を開かれたわけですね、大きく言えば。手を差し伸べられた。それでこのサマリヤの女はびっくりした。実はこのサマリヤの女は少々身持ちがわるくて、五人の夫がいたけれども、それももう今どこへ行っているのかわからないというような女

に対して、イエスは親しげに「水をくれ」と言われた。それで怪訝（けげん）に思ったこの女は、
「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」
と訝（いぶか）って言った。
10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物（たまもの）を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」
とんでもないことをこの人は言い出した。
11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。
「主よ」というのは、目上の人に対して使う言葉です。なにも「神さま」とか、そういう意味ではない。「だんなさま」というような意味です。
どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」
問答がトンチンカンなんですね。キリストが仰ったのは、
「霊の水、死んでも死なない永遠の生命の水、霊水をやるよ。この井戸水は、なるほどヤコブもまたその子孫たちもそれで命を養ってきた、大事な井戸だ。命懸けで守るべき井戸だ。しかし、私が与えようとしている水はそれよりももっと素晴らしいんだよ」
と、そう仰ったけれども、この女はわからない。
「渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」
と。これは怠け者の答えですよ。
「もう水を汲みに来なくていい。こんないい水をもらったら、自分はバンザイだ」
とこの女は言ってます。次元がちがいますから、
「あんたでは話にならん。夫を呼んできなさい」
とキリストは言われます。

●人生の大事な瞬間

ここまでのところで非常に大事なことがくみとれると思う。この女の人は、身持ちのわ

るくて、おそらく人々からは爪弾きされ、白眼視されているような人かもしれません。その人が何の予知もなく、お昼にこの井戸の水を汲みに来た。そこにイエスが旅に疲れて坐っておられて、「水をくれ」と言われた。ここに全く予期せずして、彼女は実は神さまに出会っているんです。神さまのほうからイエスという方を通して、この女に近づいて来られた。神さまのほうから声をかけて、道を拓かれた。

対話というのは大事ですよね。何かひとこと声をかける、

「いい天気ですね。ご精が出ますね」

と。そしたら心が開ける。そして話しているうちに、語り手の大事なものが流れ出ていく。そういう場面がこれです。全く偶然としか言うほかありませんが、これが神さまの摂理です。神さまのほうで予定なさって、ご用意なさって、この女にと思われたんでしょう。

●文化文明とは次元がちがう

この女が言っていることが面白い。キリストに対して、

「あなたは汲む物を持っていません。井戸は深いんですよ。ヤコブよりあなたは偉いんですか？」

と。確かにイエスは見すぼらしく見えたのかもしれません。イエスといえども、20～30メートルの深い井戸につるべもなく、水を汲むことはできないでしょうと。

私はこの問答の中に、この世の文化・文明といったものの一つの徴のようなものを見るんです。今は文明・文化が物凄く進んでいますから、そういうものの絢爛豪華さに対して、キリスト者は本当に素手です、無手です。ですから、何もできない。また哲学、その他いろいろ人文のほうでも、まずキリスト教といえば、否定してかかります。歴史もその他学問もみなキリスト教に敵対いたします。

「あなたは水を汲む物を持ってないでしょ。こっちのほうが、先祖ヤコブのほうが偉いんですよ。そうじゃないですか？」

と訊いてます。ところが、実はどっこい、キリストはその上手を行かれた。

「なるほど私は今、この井戸の水を汲んであげることはできない。今、パンをすぐに与えることはできない。今すぐあなたが求めている、この地上で一番欲しいもの、お金あるいはその他いろいろ、それをすぐに魔術師のように差し出すことはできない。だけども、私が与えようとしているものは次元がちがう。この水を飲む人はまた渇く。しかし、私が与える水を飲む人は永遠に渇くことがない。私が与える水はその人の中で湧き出て、永遠の生命に至る水の泉となるんだよ」

と。これがキリストが実は私たちに差し出してくださっているものです。確かにこの井戸の水なくしては、ヤコブも子孫も羊たちも生きてこれなかった。掛け替えのない大事な水なんです。それをイエス様はなにも否定なさっていない。

「そうだよ。だけど、それだけでは人間はだめなんだ、また渇くんだ。井戸の水はいつか涸れ果てる。あなたの命もいつかは終りがくる。尊い命を養ってくれるこの水は尊い。しかし、その水に養われながら、それを通して奥に、永遠の生命の水を飲まなかったら、この人生は空しい」

と、キリストは言っておられる。

●働くことが祈り

ここを間違わないでほしいんです。よく「宗教」と言いますと、なにか

「宗教は祈り三昧でこの世のことはどうでもいい」

というふうに、

「もう水を汲みに来なくてもいいように、その渇くことのない水をください」

と、怠け者をつくるように、あるいはこの世の事に全く無関心で、何も積極的なものを持たない。ただ彼岸に憧れてその日を待っている。そういう怠け者を作り出す阿片のように誤解している人があります。そうではない。この生命の水がきたら、本当に積極的にこの地上での仕事に打ち込むことができます。

「何の憂いもなく、明日死ぬ身であっても、私は今日一日の命を神に在って燃焼する。そうしたら、それは永遠だ。明日があると思うな。今日一日、今この時に生き抜けよ」

と。そういう生き方ができるんです。

私はこのキリストに触れるまではそれができなかった。過去を悔いて、自分がもう嫌でしょうがなかった、悔いばっかりで。それから、将来のことを思うと不安ばっかり。過去の重荷、嫌さ加減、それから将来の不安、どっちも真っ暗。その二つの真っ暗に包まれると、現在はまた真っ暗なんです。そういう生き方をして苦しんで悩んでいました。まぁ思い詰める質、また、何でもとことんやらないと気が済まない質だったのかもしれません。

若いときに罪の自覚、それから死の恐れ、この二つですね。そういったものに実はさいなまされていた。それはやがて自分の身体を蝕んで、私は健康もすぐれなかった時期がずっと続きました。

「祈ることとは何か。働くこと（ラボラーレ）が即ち祈りだよ」

という。祈りとは三昧ではない。いつもキリストに自分自身を投げ入れて、キリストに包まれて、そして地上の一歩一歩を踏みしめ歩いていく。歩くことが、働くことが祈りだ。今日一日をキリストと一緒に歩く。

「今日、汝、われと共にパラダイスなり」

と、あの十字架上の盗賊に仰った言葉のように毎日毎日、キリストと一緒に歩いて行く。

●永遠の生命の水

そういうことで、この永遠の生命の水というのは実は、この文化文明を底から担っているものなんです。花があります。その根っこが地下水に根を張ってそこから水を汲み上げて育っていく。キリストの霊水をいただいた者が文化文明を支える。それがなければ、その文化文明はどんなに一時的に栄えていましても、必ず滅びていく。ローマも滅びましたし、権力もその他絢爛たる文化も、もしそれが根っこを持っていなかったら、必ず滅びていく。

そういうことがこの対話で出ていると思う。また、私たちはどんなに仕事に熱中したり、いろんな生きがいを地上で持っていましても、フッと空しくなることがありませんか。女の方だったら育児に専念している、学者は学問に打ち込んでいる。やっている時は本当に楽しいんですよ、キリストも何もないんですよね。だけど、それがあるとき終わったとき、そのときに喜びと共にフッと空しさが出てきたりする。そういうことで、みんな渇くんです。この世の仕事、この世の生きがい、いろんなことに携わっていますと、いつか渇く。疲れる。そんな時に本当に安らぎがほしい、永遠のものがほしい。それをキリストが、

「私がそれを持っている。いや、私の中に神さまが泉して湧いてくださっている。私から生命の水が流れていくんだよ」

と。キリストは神さまに完全に明け渡しておられるから。だから、キリストが泉になってくださる。

無私者、私無きひと。我執の無きひと、無我なるひと。罪無きひと。善も無きひと、無善者。何も無いひと、「神さまだけ」と言って生きていたひと。このキリストから生命の水が流れていく。

キリストは、皆さんご承知のように、荒野であの試みに遭われたですね。あれは聖霊を受けられてから、荒野に導かれて四十日四十夜、獣だけが住んでいるような所で試みに遭われた。四十日の断食を終えられたとき空腹を覚えられた。飢餓の状態です。その時に試みる者がやってきて、

「あなたが神の子ならば、この石をパンに変えてごらん」

と。有名なところですね。キリストは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」

と。飢餓のどん底ですよ。もう少し続けば命はないかもしれない。そういうどん底で、肉体の限界をつぶさに味わわれた。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉、神の言葉、それで私は生きている」

神の言葉に霊があります、神の霊がこもっています。神の言葉が霊となって火花する。その人の中で泉するんです。生命も何もかも全部、キリストは神さまに差し出しておられる。

もうあそこから、キリストの献げは始まっている。あのゲッセマネを通って十字架に至るまで完全に、

「父よ、汝の御意を。あなたの聖意だけが私の食物です」

と、その貫きのキリスト、そういうお方でございます。

神さまは我々に生命の水を下さる。この生命の水は、実は創造的な力を与えていきます。万物は神さまの創造に成っているんです、この大自然も。みんな神の作品なんです。実はヤコブよりも、キリストは先におられた。

「アブラハムより我は前にあるなり」

と、ヨハネ伝に書いてある。霊なるキリストが神の聖座にいらっしゃった。それが受肉して地にくだって来られた。我々罪びとと関わりを持って、我々を救わんがために、我々を天の生命に満たすためにくだって来られた。

●足を洗う

有名なあの最後の晩餐のところで、夕餉のあと弟子たちの足を一人一人洗われた。あの時代は裸足で歩いていますから、一番きたない僕の仕事をキリストは、フッと思い立ってなさった。手拭いを腰にまとって、盥に水を汲んで、一人一人の足を洗われた。奴隷の仕事をなさった。

キリストは馬槽に生まれられた、どん底の生まれ方をなさった。そして今、最後にまた奴隷の仕事をなさった。キリストこそは神の僕、本当に僕の姿です。神さまの僕である方はまた人の僕になられた。徹底的などん底の姿になられた。そして足を洗われた。ペテロは、

「私は洗ってもらうのは要りません、畏れ多いから」

と。そうするとキリストは、

「もし、私がお前の足を洗わなかったら、お前と私はもう関わりはないよ」

と仰った。これが福音であります。本当にこちらの立派さではない。こちらの善さではない。こちらの立派さで天国へ行けるなら、たくさんの人が天国へ行ってます。キリストが来ることは要りません。天上で微笑んでおられたらよかったんです。それでも、

「義人なし、一人だになし」

と。誰もおのが悟りで、おのが善行で、おのが信仰で救われない。そういう罪と死に気息奄々たる現世にキリストは降って来てくださった。足を洗ってくださった。

「足を洗うために来たんだよ、お前は要らんのか!?」

「はい、洗ってください！」

とペテロは本当に平伏してキリストに言いました。そういう関わり方です。

こういうキリストをいただきますと、私たちは本当に神の霊に貫かれて、私たちは甦っていきます。キリストの霊が私たちに宿りますと、本当に私たちは甦っていきます。

無条件でキリストが与えようとしてくださっているものを、無条件で「はいっ」といただく。それだけです。この女にだって、キリストは何も条件を付けておられない。

「もし、あなたが神の賜物（たまもの）を知り、また『水を飲ませてください』と言った人が誰であるかを知っているなら、あなたのほうから願い出たことであろう」

と。これはキリストに出会っているんですけれども、どなたかわからないですからね。だけれども、

「もし、ここに立っている方がどなたであり、神さまは何を下さろうとしているか、そのことをもし知ったら、あなたのほうから願い出ただろう。そしたら、その人はあなたに活ける水を与えたよ」

と、それだけです。「願い出たら与えたよ」と言ってくださる。本当に有り難いですよね。

●十字架の蔭に泉湧きて

これはヤコブの泉を通してのお話ですけれども、本当の霊の泉はどこに湧いているか。それは十字架という場に湧いています。十字架という場がこの泉の湧く場なんです。

泉は清いでしょ。人を生かすこのヤコブの井戸も実に清澄な水が滾（こん）々と湧いている。清らかな水、それはどこに湧いているか。無色透明の水はどこに湧いているか。それはキリストの十字架の場、十字架でもってキリストはご自分を砕かれた。神さまに砕かれた。審（さば）かれた。私の罪を背負って、私のこの我執を背負って、私の呻きを背負って、十字架で砕かれ給うた。十字架でキリスト自身が砕かれ、私がそこに共に砕かれ、キリストも私もみな無くなった。そこに真清水が湧いた。キリストは復活せしめられて、新しい霊体となって顕れ給うた。もはやそこに死もない、悲しみもない、新しい生命が燦然（さんぜん）と輝いている。復活の朝です。そのキリストが天界に昇られて、弟子たちに

「お前たち、祈っておれ。やがて聖霊、助け主がくだって来る。この助け主が来たならば、お前たちは力を受けて、世の終りまで地の極（はて）までわが証人（あかしびと）となれ」

と言われた。それが五旬節、ペンテコステ、聖霊降臨節で成就しました。その聖霊が実は泉なんです。泉の水なんです。湧く場は十字架であり、湧いている泉は聖霊だったんです。聖歌（396番）の1節に、

「十字架の蔭に泉湧きて、
いかなる罪もきよめつくす。
おらせ給え、この身を主よ、
十字架の蔭にとこしえまで。」

という歌詞がある。

皆さん、無条件だと言いますと、

「いやぁ、私のような汚れた者が」

と仰るかもしれません。そういう「私のような者が」というのが全部、十字架で片付けられているんです。さっきの「足を洗う」という、どろんこを洗ってくださった、それが十字架なんです。十字架の血が一切を清めてしまっている。

「もはや、汝は清し、罪なし。私が一切を片付けた。今は祈っていなさい。聖霊を上げるから。この生命の水を上げるから」

と。これが無条件の恵みです。無条件に受けとる人に無条件に下さる。これが聖霊の水なんです。その聖霊が光を発します。

●詩篇36篇9節「生命の泉」

小池先生が今度、『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻、１９８０年刊）を出されました。その一節に詩篇36篇というのが選ばれております。その36篇――先生は原典から直接訳しておられる――その中にこういう一節がある。

5(6)エホバよ、あなたの愛憐（あわれみ）は天に漲（みなぎ）り
あなたの信実（まこと）は雲にまで及ぶ。　……
7(8)あなたの愛憐（あわれみ）は貴（とうと）い哉、ああ神よ！
人の子はあなたの翼の陰に寄り添う！
8(9)彼らは汝が家の脂（あぶら）で飽き足り、
あなたは汝が愉楽（たのしみ）の流水（ながれ）を彼らに飲ましめ給う。
9(10)そは生命（いのち）の泉はあなたの許（もと）にあり、
あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。

こんな素晴らしい句があります。この「生命の泉」の中に私たちが浴する道はただ無条件に、己自身をあるがまま、キリストの中に投げ入れる。祈りでもって投げ入れる。それだけだと。

●我キリストと偕（とも）に十字架せられたり

ガラテヤ書2章20節に、

「我キリストと偕（とも）に十字架せられたり。最早（もはや）われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生き給うなり」

とあります。御霊のキリストが私の中に生きてくださっている。そういう現実が必ずやって参ります。

私は長いこと悩んできましたから、そしてまた信仰の道に入ってからも、

「聖霊がほしい、聖霊がほしい」

と思いながら、十数年悩んできましたから、今はっきりと皆さんどなたにでも証言できます。必ず主は下さる。必ず上から降（くだ）ってきて貫いてくださる。そして今度は、その人を通して

流れていくんです、この泉は。必ず流れていく。

総じて、キリストのところへ来る人はどういう人かと。私は大学という賢い人ばかりの集まりの中におりますと、このパウロの言葉で慰められます。まず教室でキリストのことを言いますと、みなニヤニヤニヤと横を見合わせてザワザワザワとして、「なんだ、キリストか」というような感じなんですよね。「なんと意気地なしか、神にすがるなんて」と。そういうふうなことで、みんな頭がいいですから。

だけど、パウロは言ってくれた。コリント前書第1章26節から、

「26兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おおからず、

「肉によれる」というのは「生まれながらの」ということ。

能力ある者おおからず、貴きもの多からず。27されど神は智き者を辱しめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、28有る者を亡さんとて世の卑しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」（コリント前1・26～28）

つまり、この世で見捨てられた者、この世で渇いている者、この世で行き詰まっている者、悲しんでいる者、そういう者をキリストは探し求めて出会ってくださる。このサマリヤの女は実は渇いていたんですよ、魂が。彼女は身持ちもわるかった。だけれども、何か魂で求めていた。それを知って、神さまのほうから近づいて来てくださった。私はそう思います。

「恵福なるかな、悲しめる者、その人は慰められん」

という山上のキリストの言葉があります。この地上で幸福の絶頂にある方、事業が成功して得意満面な方、いろんなそれぞれのお仕事で調子よく行っている人はあまりキリストのところに来ようとはしない。滑ったり転んだり躓いたり、挫折したり、病に倒れたり、命を懸けてきたものに裏切られたり、何かそういう本当にもうどこへも持っていきようもないような、その悲しみと言いますか、もう焼け酒飲んでもなおどうにもならんといった、そんな魂に実は「山上の垂訓」のあの言葉が――「垂訓」ではない――キリストの呼びかけ（告白）なんです。

「さいわいだよ、お前。私がお前の友ではないか。私はお前と関わりを持ちたいんだよ。今、この言葉が聞こえるね」

と、そう言って語ってくるのがあの山上の言葉です。だから、本当に谷間で聴くべき言葉ですね。そしてその時に聴いた言葉はいつまでも離れないんです。

だから一切、この神さまは公平な方です。この世で見捨てられた者、この世でうまくいかない者、そういう者にいつも豊かな慰めを下さる。

このコリント前書第2章では、この世の智者に対してパウロは開き直っています。自分はコリントへ行くとき、実にアテネで失敗いたしまして、智者が集まっているアテネでパウロは論陣を張ったけれども、みな聴いてくれなかった。それですっかり自信を喪失して、

大阪のような商売の町コリントへ出掛けるとき、もう破れかぶれ、

「キリストだけ。御霊のキリスト、十字架せられ給いしままのキリスト。もうそれ以外何も知らん」

と。これを引っ提げて行ったんです。

「4 **わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。5 これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。**」（コリント前2・4～5）

はっきりとこの世の文化文明に訣別しました。「神の言と神の力で」と言って、そしてコリントに教会ができました。だけど、実は「神の智慧は深いんだよ」と、6節から書いてます。

「人はこちらを知らない。しかし、こちらは神さまに知られ、一切を見る光が与えられる。人に知られていないようで、実はその人は神に知られ、神によって輝いている。倒されぶっ倒されているようで、実は神さまは立たせてくださっている。弱いようで、実は強いんだ、誰よりも強いんだ」

と。そういうことをパウロはコリント書の中で随所に書いてくれています。だから、このパウロという器は、私たちにとって本当に励ましです。

●永遠の生命をいただく

ヨハネ伝の7章を見ます。37節から、

「37 **祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」39 イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている〝霊〟について言われたのである。**」（ヨハネ7・37～39）

はっきりとここで、

「その人の中から生ける水の川が豊かに流れ出ていく」

と。キリストは生命の泉でした。みんなにその泉を差し出して、水を飲ましてくださった。

「その水を飲んだ者は死なない。永遠の生命をいただく」

と。本当に死なない。キリストのように羽ばたいて天界に行きます。のみならず、この地上でその人自身が今度は泉とされる。そして、苦しんでいる人や困っている人に流れて行く。本当に流れていくんです。

ヨハネの黙示録というところにまたこの「泉」のことが出てきますので、最後の世界をヨハネが幻で示されたところですが、21章1節から読んでみます。

「1 **我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。2 我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾り**

たる新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。3また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、4かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり』5かくて御座に坐し給うもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き記せ、これらの言は信ずべきなり、真なり』6また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始なり、終なり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。7勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。』（黙示録21・1～7）

こういう終末の世界が描かれています。これは最後の世界ではありますけれども、実はこういう世界を私たちは味わっています。はっきり言いまして、こういう世界が今、私たちの中に既に泉して湧いています。それがやがてかの日に完成しますけれども。本当にそうなんです。私たちは、地上では戦いがあります、涙があります。苦しみがあります。しかし、その中にあって実にこのキラキラ輝いているものをキリストは下さっています。

私たちは本当に何者でもありません。どの派にも属しません。ただ私たちはこの新約聖書が証言しているこの福音の現実、使徒行伝、そして使徒たちの書簡、そういったところに溢れているこの聖霊の現実。ユダヤ人も異邦人もない、男も女もない、奴隷も自主もない。人はみな神の子だと。神さまは救おうとしてなさっている。そういう尊い器です。この一人ひとりに神さまはキリストという宝を一人ひとりの中に与えようとして呻いておられる。

「御霊言い難き呻きをもて執り成し給うなり」

と。天界のキリストはご自分の霊を聖霊という姿で私たちに送ってくださった。そのお方が天界のことを教えてくださる。

「御霊をいただいたら、誰にも教えてもらわなくても、御霊自身が教える」

と書いてあります。それがパウロが「霊、霊」と言っている、そういった事態なんです。キリストも、

「神は霊だ。礼拝する人も霊と真をもって拝しなさい。この山でもあの山でもない。エルサレムでもゲリジブの山でもない。」

「霊と真をもって。あなたのいるお台所が礼拝の場だ。あなたのいる働いている場が礼拝の場だ。そこで『主さま！』と祈りながら、キリストに全托して、そして歩いているところ、そこにキリストの御霊が臨み、あなたと一緒に旅してくださる」

と。こういった現実が、私は本当に正真正銘、皆さんに告白したい現実なんです。

時間も参りましたので、これで終らせていただきます。どうも、有り難うございます。